

浄土

monthly
JODO
1997-12



1997
12
December

法然上人鑽仰会・発行



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

☎ 0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間] 9:00~23:00 (年中無休) [インターネットホームページ] <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

寺院紀行

寺に歴史あり。

人々に信仰あり。

日本の、心の故郷を紀行する。

撮影 ● タカオカ邦彦

富士吉田

西方寺
万年寺



平成7年東京芝増上寺御忌法要で導師を務める大饗俊澄住職。
左下、紫衣の西方寺野村之彦住職が臨導師を務めた



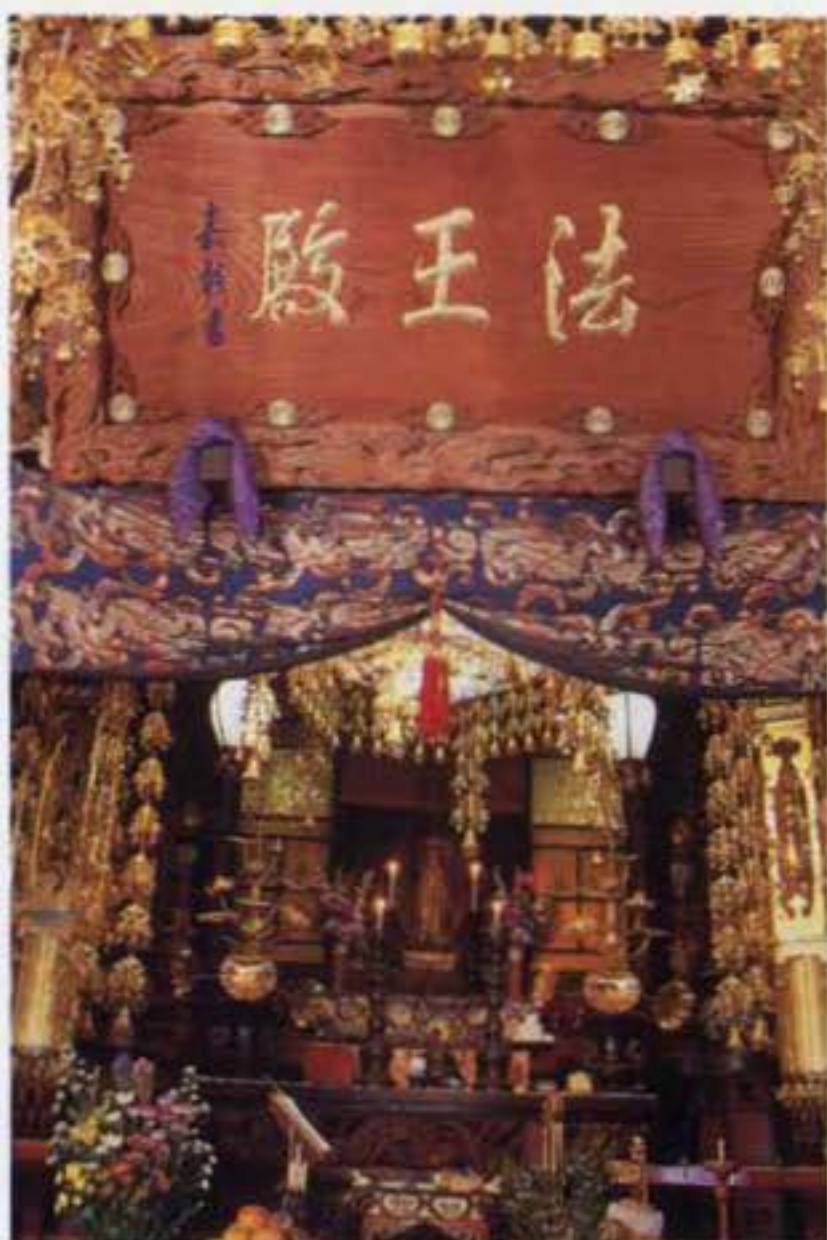
万年寺



万年寺に伝わる寺宝の観音像



山腹にある本堂への入口となる山門。
ただし開かずの門である



西方寺本尊



七堂伽藍がそろった西方寺。写真は平成建立の五重の塔



第三十一世野村之彦住職

西方寺



増上寺の黒本尊を戦中預かった経蔵



黒本尊守護への感謝状



富士山と並び富士吉田の顔である河口湖



山梨県の文化財に指定されている西方寺寺宝の板碑

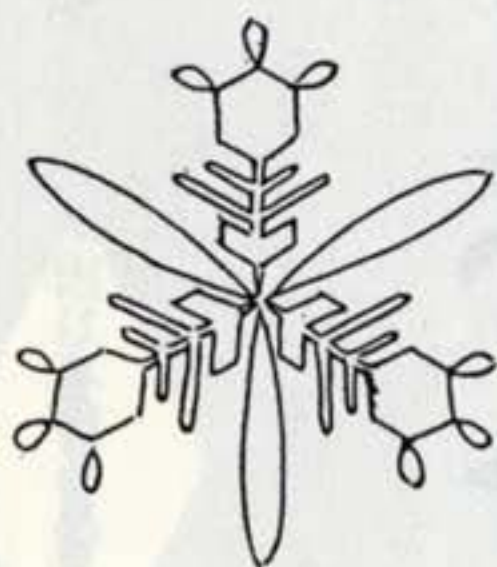


北口本宮富士浅間神社の鳥居。霊峰富士への登山口のひとつ、富士吉田口にたえずむ

浄土

1997/12月号 目次

唐沢山阿弥陀寺再建の因縁	土屋光道	8
表紙は語る	岡 克己	17
寺院紀行 富士吉田西方寺・万年寺	真山 剛	18
日常仏教語		27
連載小説 法然上人をめぐる人々	石丸晶子	28
若和尚のチョットいい話		37
御法語に聴く		38
いい加減にしろ		43
ホットアングル	利根川 裕	44
うまい野菜と料理の話	我田 大	50
仏教相談	大室了皓	56
Jフォーラム		61
事務局便り		68
編集後記		70



表紙題字＝浄土門主 中村康隆猥下
表紙撮影＝岡 克己
アートディレクション＝近藤十四郎

専修念仏道場復興の奇蹟

信州唐沢山阿弥陀寺
再建の因縁

巻頭特別寄稿

土屋光道



去る十月四日、長野県諏訪市郊外の唐沢法山阿弥陀寺の復興落慶法要が挙行されました。四年前の平成五年四月二十一日の夕刻、毎日出勤の管理人が下山した後、山腹より煙が立ち昇った。折から県下に乾燥注意報が出されており、何せ山の上で消火の水利を欠き、消防車が下からポンプをつないで水を上げた頃には火の勢いはつのもり、手の施しようもなく、本堂、庫裡、書院、宿泊施設、土蔵はもとより、崖上の岩屋観音堂（信州第二十四番札所）すべてが焼けて灰塵に帰した。

報せを受けて驚いて、翌朝駆けつけた私は、くすぶり続ける廃墟の前にただ呆然とたたずんだ。私が三歳頃から今日までの六十年余、毎年訪れた思い出多い懐かしいあの建物はかき消え、周囲の樹木は云うに及ばず、切り立った崖も、観月堂に下る参道脇の落葉にも焰が舐めた跡が続き、一面茶色に焼けただれて火勢の物凄さを語っていました。

消防官、警察官が出火の検証にあちこち調べていました。その立会いに市内正願寺住職宮沢説雄師と弟さんが肩を落して見守っていました。当阿弥陀寺は檀家が一軒もない寺として、歴代の正願寺住職が兼務住職としてこの阿弥陀寺の維持管理に当たって護持して来たのです。

疲労困憊こんぱいのお二人に近寄りお見舞い申し上げました。結局、出火原因は不明とのことでした。何とか復興をと激励して別れたものの檀家からの資金のあてもなく、住職も半ば絶



望的な御見通しでした。それが何と四年半で旧に倍した復興を遂げたのです。まことお念仏の功德、奇蹟と云うほかはありません。

○落慶法要式典

去る十月四日十時半より落慶法要が営まれました。新本堂は善光寺大本願旧本誓殿を解体移築したもの、その勝縁から、御導師に善光寺名誉法主一條智光台下の御親修を請い、協導師は住職宮沢説雄師と貞松院住職山田和雄師、式衆は諏訪組寺院諸師により、厳肅莊嚴裡に挙行され、来賓に鎌倉大本山光明寺戸松啓真法主、大本山善光寺大本願の鷹司誓玉法主、成田有恒浄土宗務総長以下諸局長、宮沢一成長野教区長、宮林昭彦・大谷旭雄大正大教授ほか多数が参列、僧俗約三百人を超える人々で広い本堂が立錫の余地もない盛儀となりました。

この本誓殿で幼少の頃より奉仕されてきた智光台下は感激の面もちで、転座授与十念の後、満堂の参列者に向って、九十一歳の御高齢とはとても思えないお姿、そして凛としたお声で、

「この本堂は、明治二十八年に建立されて以来今日まで、約一世紀にわたって、四代の歴代大本願住職が御奉仕して来た建物で、住職はもとより全国より参詣の沢山の僧俗の



方々のお念仏が染み込んだ伽藍です。どうぞ、広く全国の信徒のかたがたに門戸を開かれて、念仏の声がいよいよ満ちあふれる道場にして頂きたい」

と御垂辞され、一同深い感銘を受けました。

引続いて祝辞に移り、成田総長、中村康隆浄土門主（江口総務局長代読）、宮沢教区長、笠原諏訪市長が、そして大正大学と真生同盟代表として私も後述のようなお祝いを兼ねた思い出を申し述べました。

法要を了え、招待者の祝賀の宴が湖畔のホテルで催され、約百二十人が集う盛会でした。ちなみに本堂安置の御本尊は市内小和田の「阿弥陀庵」より御入来の立派な立像。本堂右手の新築の庫裡書院は前より約二倍の四百平方メートルの広さ。水洗トイレ、風呂、ロッカーや台所も広く、従来と比べて念仏修養の宿泊設備も格段に充実一新。一、二階からの諏訪湖の展望も素晴らしく、四季折々の大自然の雰囲気と四百年來の念仏の靈氣が必ずや参籠者の心身を浄めてくれることでしょう。

○三上人記念名号碑建立

落慶法要に先立って、本堂前一隅に並び建てられた三基の名号碑の開眼供養が住職によつて行われた。



向って一番右が藤井実応前浄土宗法主・総本山知恩院門跡。中央に中村康隆現法主門跡。左に一條智光善光寺大本願名誉法主、お三方御揮毫の御名号が、真白な稲田御影石に彫られ、黒漆しを入れて鮮やかに光彩を放って現出した。除幕は夫々の願主、藤井猥下の御子息藤井正雄大正大教授、中村猥下御子息中村康雄清水実相寺住職・宗議会議員。智光台下の後継鷹司誓玉大本願御法主が順に縄を引かれました。

石碑側面には夫々建立の由緒因縁が彫まれています。

藤井猥下はお若い頃、度々、この地の別時念仏会に御参加、時々諏訪近くの浄土宗寺院の御住職をされた時代もあり、後年、この若き日の浄域のお念仏体験を印象深くお語りくださいました。

中村康隆猥下は中学生時代、大変信心深かった祖母のお供をして、この唐沢の別時念仏に参加。最晩年の山崎弁栄上人の御教化にふれ、「将来お坊さんになることに迷っていたのがフツ切れて道心が固まった、記念の場所」と追懷されました。

また、此のたび不思議なタイミングで、オリンピックの年に合わせて、大本願本誓殿を新築することになった関係で、この旧殿を移築するという運びとなりました。この間当時の長野教区長袖山栄真師（現宗務教学局長）の尽力によって善光寺勧募の一環として勧財活動が当局から許されました。これも不思議な佛縁冥助によるところではありますが、智光

上人様の並々ならぬ御芳情によるところであり、台下の頌徳を記念すべく御名号碑の建立となった次第であります。

すでに、鐘楼脇の岸壁には、巨大な徳本行者と徳住上人の御名号が彫まれています。加えてこうした、御三人の御大徳の名号石の立ち並ぶお寺は、おそらく全国にも稀なことで、それだけ、この唐沢山が特別な念仏勝縁の地であることを物語る証しであります。住職以下総代世話人も名誉なことに喜んでくれました。

たまたま、この私が建立を発起し、御世話させて頂きました。まことに身に余る法縁重なる有難いことと喜んでいきます。施工を引受けてくれた群馬県太田市の石材業柳田清氏の献身的な御奉仕も感謝にたえないことです。

今後、念仏勤修にこの地を訪れる方々が、こうした高德を偲び、その勝縁に支えられて愈々お念仏にお励み頂けることを祈ってやみません。

○唐沢、 法国山阿弥陀寺沿革

縁起によれば、今から約四百年前の文禄四年（一五九五）上諏訪の郷人の河西浄西という念仏行者が開基。その四年後慶長三年、尾張出身の念仏行者弾誓上人が諸国行脚の途、この地に逗留、開山とされた。上人は五ヶ年滞在され、当山の外に飯田の阿弥陀寺、大



町の弾誓寺、東筑百瀬の昌念寺、雲上院、松本の念来寺の諸寺を開き、後武州を廻り、箱根塔之沢の阿弥陀寺を、やがて京都洛北大原古知谷に光明院阿弥陀寺を開き、慶長十八年五月、石棺に入って遷化された。寿算六十二と伝えまゝす。

当初は堂宇はなく、裏山崖上の一坪程の岩窟に籠って念仏をされ、その声が湖畔の町にまで届いて、次第に来山帰依する信徒が増え、次第に堂宇が形を整え、やがて「唐沢や岩間に結ぶ観世音誓いの水は今も尽きせじ」の十一面観音の霊場ともなった。諸国行脚の行者の不断念仏の道場として訪れる人も多くなった。

現住職説雄師は第二十六世に当たるが、歴代住職の内、十一代の徳本行者、十二代徳住上人、二十一代は京都大本山百万遍に進薰された宮沢説音大僧正は、特に後世に名を残した。

その後特に大正五年（一九一六）、私の父土屋観道が大正大の心理学の恩師笹本戒浄師と宗史の教授であつた浅井法順師との三人でこの地を訪れ、内陣に黒幕を張って五日間の別時念仏を勤めたことが最初となり、毎年別時念仏が開かれるようになった。当時、増上寺旧学寮多聞室に父観道がお迎えして寄宿されていた念仏の大徳、山崎弁栄上人も大正九年十二月御遷化までに三回ほど、この唐沢別時念仏会にお出まし頂いた。その最後の御教化に当時中学生であつた現御門主中村康隆猊下が深く感動、将来僧侶になる決心を固められたのであります。まことに不思議な勝縁によるお出会いであります。その後大正大学（当

時の宗教大学）に進まれた康隆師は一年間多聞室に下宿され、私の両親がお世話申し上げ、その法縁が今日につながって私が御愛顧を頂いて、この度の御名号石に結実しました。

爾来、戦時下を除いて、毎年夏に父観道の真生同盟の夏期別時念仏会が七日間、前後九日間開かれ、全国より大勢の信者が参集、お念仏の声が全山に響き、多くの方が深くこの聖地を魂の故郷と呼び、深い法悦にひたりました。若き日の藤井実応猥下もそのお一人でした。私も今に尚、当時の信仰に燃えたった父を囲む信者の眼差しと、満堂をゆるがす念仏の声の熱気が甦ります。同じく中旬には弁栄上人の流れを組む光明会の別時会も開かれ今日に及んでいます。

父観道が病に臥してより今日迄、不肖私が後嗣して毎夏この浄域に念仏会を催して来ました。更に昭和四十五年、請われて大正大学の浄土宗実践仏教の伝道学を私が担当することになり、八月末の三泊四日、受講学生を唐沢夏期実践道場と銘うってこの聖地に連れて来るようになりました。爾来二十数回、千数百人の将来浄土宗を担う若き僧侶の卵が、この浄域に御縁を結んだのです。各自「将来の僧侶になる願い」とテーマし発表をさせ、夜は一時間半の別時念仏を毎晩勤修しました。初日、夏の暑さに汗を流して到着した時には、嫌々仕方なしに来たという諸君が、僅か四日目には、すっかり態度も更り、真剣な顔で仏前に今後の精進の誓約を捧げる姿は見違えるばかりに活きいきと輝いて、齒をくいしばっ



て足の痛さに耐えて称えるお念仏の声も力強く堂内一杯に響くようになるのです。その後、各地で卒業生に会うと、異口同音に、「先生、大学の思い出の中で、あの唐沢山の印象が一番強く心に残って懐しい」と云ってくれます。この声が、私をして今日迄二十数年この道場を止めずに継続して来られた原動力なのです。この間、先代御住職の奥様、現住職のお母上と一緒に泊り込んで、四時半に起きて朝食の用意にかかれ、終了後の後片付けまで御奉仕下さったその御恩も忘れられぬ感動です。こうした御法恩に多くの卒業生が募財に応えてくれました。また、地元の組寺の住職方がこぞって再建復興委員会をかって出られ、やがて全長野教区、さらに中村御門主様、大本願智光台下も添え状を全国勧募書類に加えて頂くことになり、宗務総長以下御当局にも格別に御配慮を賜りました。

また大本願本誓殿を移築出来たのも、まことにタイミングがよかったことで、短日時の復興は人知を超えたみ仏の御加護であり、長い間の積りに積ったこの唐沢のお念仏の功德、まことに稀有な奇蹟であります。

(東京・観智院住職)

灯台

撮影●岡 克己

闇を照らす光

闇の夜

漆黒の荒涼たる海に
投げ出され揉まれつづける一隻がある
波の音、船体の軋み
すなわち長い航海の疲労と不安
が頂点に達するとき
遠く、微かに
一条の光が見える
驚愕
わき上がる希望
生かされていることへの歓喜
光は次第に太く強く眩い力となって
船を包み込み
確かな航路へと導く

灯台

長い歳月を越えて
聳え立つ塔

12月

の しま さき とう だい

野島崎灯台 (千葉県)

1866 (慶応2) 年、江戸条約で建設することが定められた。1869 (明治2) 年12月18日に初点灯。三浦半島の観音崎灯台に次いで日本で2番目に古い灯台。フランス人、ヴェルニーの設計による最初のレンガ造りの灯台は1923 (大正12) 年の関東大震災で倒壊。現在のものは1925 (大正14) 年8月15日に改築された。



岡克己プロフィール■1948年岡山県倉敷生まれ。風土写真家、中村昭夫氏に師事。『Aqua21』に連載された『水のある風景』が高い評価を得る。灯台はライフ・ワーク。全国120カ所、2000枚に及ぶこれらの作品はCD-ROM『日本の灯台 第一集』(発売/ジェイ・ブレジデント)として好評発売中!!

寺院紀行

富士吉田

西方寺 万年寺

文／真山剛

撮影／タカ才力邦彦



「ほら、富士山が見えますよ、真山さん」宮崎空港から飛び立つやいなや夢現で、ぼーっとしていた頭に窓際に座っていた後輩の声^{こゑ}が飛び込んで来た。九州を飛び立ったばかりのつもりでいるので、窓越しに見える山を「えー、富士山じゃないだろう」と答えると、「日本であの形をした山は富士山だけです」と譲らない。それではとスチュワーデスに聞いてみた。

「はい、富士山でございます」

そう言われて後輩はダメを押す。「あの形は富士なんです」

日本の代名詞でもある富士は静岡県と山梨県にまたがっている。南半分が静岡県、北半分が山梨県。その北側、山梨側の麓には五つの湖が並ぶ。富士五湖と呼ばれ、西から本栖湖、精進湖、西湖、河口湖、山中湖だ。地図を広げれば一目瞭然だが、この五つの湖の中では河口湖と山中湖の間が開けている。そこが富士吉田である。

日本の三霊山は白山、立山、そして富士山だが、いまでこそ車で五合目まで登れるが、かつて富士山への登山は霊峰への登拝登山であつた。さらにその昔は遙拝^{てうはい}だつた。遙拝とはその名の通り、遙かにその姿を拝むことだ。そして実際に富士山に踏み込んだのは奈良時代に活躍した役小角^{えんのかく}（えんのおづの）といわれている。山伏修験の



西方寺参道入り口に立つ溶岩でできた石碑。
富士山麓ならではのものだ

祖である小角は呪力を身につけていたといわれ、全国のあちこちに小角の名が残っている。それだけに富士山初の登山者が小角であるか否かはともかく、富士山は修験者たちの修行の場であつたことは確かなようだ。

一般の人々が登拝登山を始めたのは室町時代で、江戸時代に富士講がピークを迎える。この富士参拝をする信者のことを道者というが、この道者の参詣を案内するのが御師（おし）と呼ばれる人々であり、この御師は道者の道案内や宿泊の面倒もみる。必然的に御師たちの作る町ができてくる。富士吉田はそうして栄えた町である。いまでも御師の家並みが残り、富士山の額を飾る鳥居も残っている。

この富士吉田、現在の富士吉田市の小明見（こあすみ）という町に二つの浄土宗の名刹がある。『郡内三十三番観音霊場巡礼記』（山梨県南都留郡羽田一著昭和五十一年発行）に仲良く並んで紹介されている。

《第七番 浄土宗 三宝山比教院万年寺》

大同三年（八〇八）弘法大師の止宿によって建立され、関東第一の真言宗の寺となったが、その後天台宗八代を経て再び真言宗に改まった。しかし永正七年（一五一〇）大本山鎌倉光明寺の専蓮社念譽上人が住職となり浄土宗に改宗。現在までに四度の移転、

三度の火災にあっている。

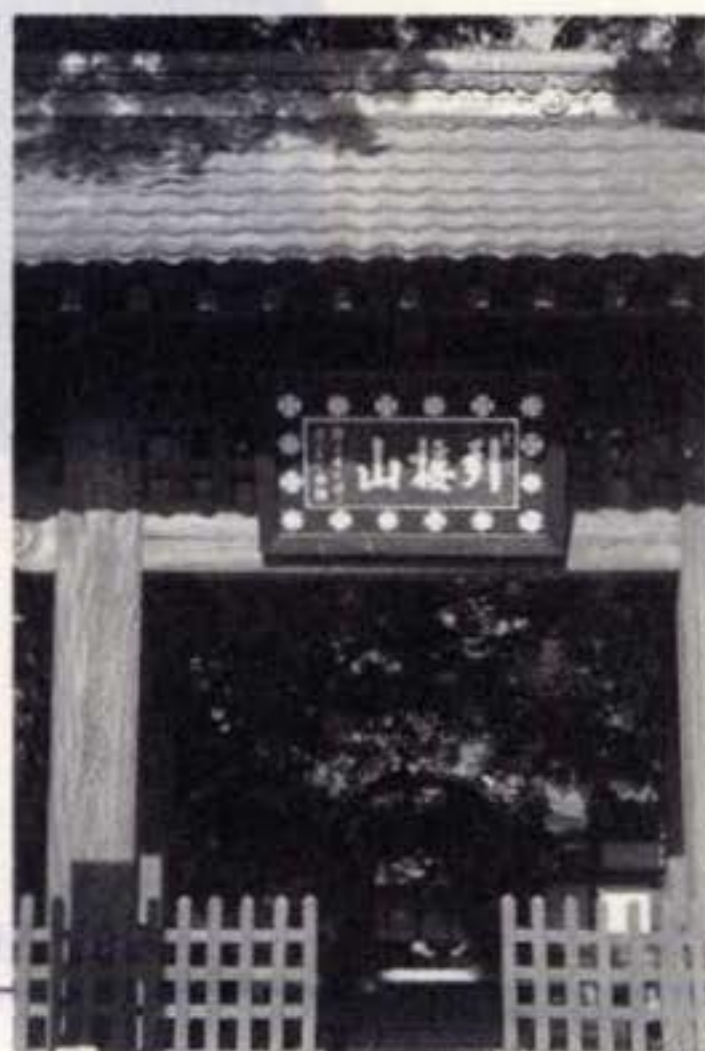
《第八番 浄土宗 引接山西方寺》

治承三年（一一七九）新田源氏の血を引く新田義重の五男経義が開山。経義は妙心寺で出家し祖底禅師となっており、臨済宗の寺として建立された。永禄年間（一五五五～一五七〇）に浄土宗に改宗。現在までに三度移転している。

また『富士五湖周辺の草の根文化をもとめて』（発行所富士五湖青年会議所 昭和五十一年発行）にも順序が変わるが仲良く並んで紹介されている。こちらは書名通り文化的な要素についてふれている。

《42 西方寺》

宝物の主なものに開基開山の尊牌十一面観世音菩薩霊像、宝剣「小安丸」、石像、板碑などがあり、板碑は鎌倉期のものでは県内最古、全国的にも古いもので県の指定文化財になっている。小明見宿の村造りと共に現在地に移転、浄土宗に改宗し引接山浄土院西方寺と公称し諸堂塔完備し今日にいたっている。源平以後、鎌倉街道の裏街道から入った地域として南朝関係の人士、隠密等の民俗の潜入がしばしばあり、また明治以後は国賓、文化人の出入りが絶えず、外国の独立の志士や有栖川宮や大隈重信、勝海舟、あるい



参道から見た西方寺の山門



眺望が素晴らしい境内。奥が万年寺本堂



西方寺境内。左が本堂

は多くの墨客などがこの寺を訪れている。

《43 万年寺》

山門は檜膚葺で安政二年（一八五五）に当時の名大工により再建され、その精巧な造りで扉が一度閉まると開かないとまでいわれ、「あかずの門」とも呼ばれる。本堂左手の鐘楼は市の文化財に指定されていて「万年寺の晩鐘」として市八景のひとつに数えられている。本堂右手の六地藏は中央に弥勒菩薩を配したもので子育て地藏としても有名で郡内最古のものである。また「みそ汁檀家」と呼ばれる言い伝えの元になる万霊塔などがある。

こうした二冊の郷土誌に目を通すと、改宗や移転、そして火災に伴う多くの苦勞がうかがわれるが、その古刹、名刹ぶりは相当のものである。車で走ると三〜四分の距離にある両寺だが、その行き来は大変頻繁で、葬儀や行事の度に両寺の住職が行ったり来たりしているという。自分のお寺の和尚さんがどっちだったか忘れてしまうお檀家さんもある。これは冗談だが、それほど交流が多いということだ。

それではまず先輩にあたる万年寺の住職に登場していただく。

第三十五世犬飼俊澄住職は関東大震災の二週間後、大正十二年九



万年寺第三十五世犬飼俊澄住職

月十五日生まれで、史学を学んだ大正大学を卒業して同大の寮の舎監を十二年務めた。先代が遷化（せんげ・僧侶がなくなること）され昭和三十六年に寺に戻る。そして現在に至るが、木訥で心暖まる笑顔が印象的だ。その笑顔でお話しいただいた。

「浄土宗になる前のことはよくわかりません。とにかくわかっているだけで三度焼けていますから、記録がまったく残っていません。真言宗の頃には富士へ修行で入山する僧侶の道場になっていたかもしれません。

檀家のみなさんとはそれこそ兄弟みたいなつき合いで、お互いに言いたい事を言い合ってます。それこそ法事や葬儀も融通がききますから」

最後に平成七年に増上寺の御忌（浄土宗の宗祖法然上人の年忌の大法会）で唱導師という大役をこなした時のことになり、住職がその写真を見せてくれた。後日編集部に聞くと、この唱導師というのは誰でもこなせるものではないという。犬飼住職にとっては一つの区切りのような行事だったようだ。

さて、続いて西方寺のご住職の登場だ。昭和十年四月一日生まれで第三十一世（禪宗——五世十代）の野村之彦住職はなんと二尺四寸もある大黒柱のある応接間でインタビューに応じてくれた。



万年寺境内にある六地藏は中央に如来を奉っている

「わたしは話好きで、ほおっておくと三日でもしゃべってますよ」という野村住職、そのエネルギーに圧倒された。地元の様々な役職、そして山梨からは一人の浄土宗の宗会議員の重職に就かれている。さてこのバイタリテイの元はいったい何だろうと考えているうちに、ちやんとその話になっていた。

「大正大学を卒業するとすぐに、元外務大臣有田八郎の秘書をやっていたんです。広く世間を見ることを有田先生から教えていただきました。大学では英文科でしたが、お寺に戻ってから子どもに英語を教え、教え子は千人以上です。地元はもちろん、いろいろな役回りも喜んで受けさせてもらっています。」

私のモットーは僧侶はもっと在家の人に近くなてはいけない、ということです。仏飯を食^はんでいるなら人の心を魅きつけられるようにならなくてはいけない、ということですよ」

三日分の話をこちらの都合で三時間にまとめていただいたので、面白い話の続編は次の機会になってしまったが、増上寺にある徳川家康の守り本尊だった黒本尊の話は印象的だった。

増上寺の本堂左手に安國殿というお堂が立っている。数知れぬ多くの人々が祈願とともに仏さまに捧げるお香の煙りで真っ黒になったといわれる阿弥陀如来の立像が奉られている。この家康の守り本



万年寺本尊

尊が太平洋戦争の末期、この西方寺に預けられていたという。東京港区にある増上寺は空襲で無残にも焼けてしまっただけに、もし、この黒本尊が増上寺に残されていたら……。

いま増上寺は正月、五月、九月とこの黒本尊の祈願会を行っているが、黒本尊をいまに残した西方寺の果たした役割は大きい。

ここに『明見町の教育と文化』という本がある。西方寺の先代、野村盛之住職（故人）が編集、明見町役場が昭和二十六年に発行した本だ。「戦後一番大きい問題は、日本をどう云う教育の方法で立て直すかと云う事であった。」という野村盛之編集長の発刊のことばで始まるが、西方寺、万年寺が果たしてきた教育機関としての歴史も記されている。寺子屋として寺を開放し、住職自らが教育に携わったことも書かれている。

かつて霊峰の登山者でにぎわった富士吉田だが、いまも観光地として多くの人が訪れる。富士北麓は冬には十万人の人口が夏には百万人以上に膨れ上がるという。富士吉田はいまも昔も富士山のある町だが、明見は昔もいまもこの二つのお寺のある町のようなのだ。

（ルポライター）



西方寺境内にたたずむ高浜虚子の筆塚

テレビの捕物帳などで、悪人とおしが仲間割れして「こうなりゃ一蓮托生、恐れながらと奉行所に訴え出て、手前らの悪事を何もかもばらしてやる」などというように、むしろ悪い方向かって、だれかと運命を共にする、というふうに使われています。しかしお経の中に登場するこの語は、それとは全ったく正反対の意味で用いられています。蓮の花が仏教でいちばん尊ばれる聖花であることは周知のとおりで、仏像の台座はほとんど

蓮の花を象っています。聖観音様は手に蓮の花を持っておられます。蓮が泥の中に生い立って、しかも泥水に染まらぬ美しい花を咲かせるところが、民衆の中に立ちまじって生活しながら、すがすがしい境地を体得している菩薩の姿に相通じるところがあるからでしょう。蓮の花はまさに極楽浄土を象徴した花なのです。

この一蓮托生（いちれんたくしょう）の意味は、来世は極楽浄土の同じ蓮の花の上に共に生

一蓮托生

いちれんたくしょう

まれて、仲らく暮らしましょうということなのです。これが江戸文学の心中物などによく使われ、現代の我々でも、愛・死・往生・極楽・蓮のうてな、と並べると、まことに自然に「死」ということに、ある一種の美的イメージを描けてくるのではないのでしょうか。

この世で結ばれなかった悲恋の恋人が、または仲のよい夫婦が、来世こそは、または来世も共にお願い、念じ続けられているのではないのでしょうか。

念珠



■ 伝承の技と心

念珠の修理・仕立替承ります。

○ アクセサリーの修理・加工・リフォームも承ります。

◆ カタログをご請求下さい。
「念珠年報」をお届け致します。



平野屋

本店 東京都文京区湯島4-5-3

☎(03)3811-4450 〒113

四谷店 東京都新宿区四谷2-8

☎(03)3355-2250 〒160

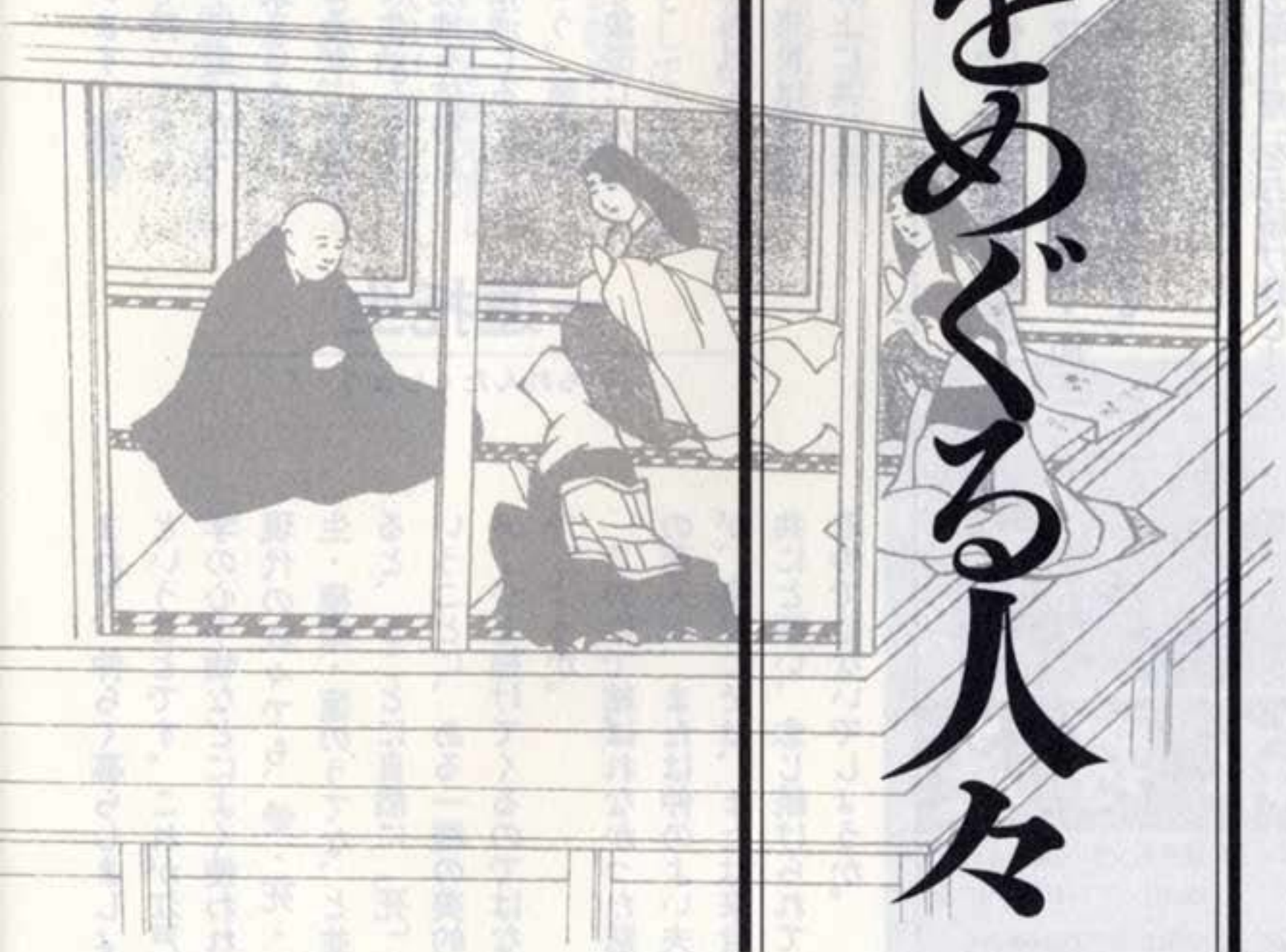
連載小説

法然上人をめぐる人々

【第十回】

室ノ津の遊女

石丸晶子



二十

それから一刻^{いっとき}ほどのちのことである。室ノ津の沖に領送使の一行が乗る海船が姿を現わした、とみるや岸に近い小島の松林のかげに泊まっていた一艘の小端舟が、すべるように沖に向かって漕ぎ出していった。

風ぎの海面に、春の正午^{まひる}の陽の光がまぶしい程に照り映えている。

小端舟に乗るのは、言わずとしれた室ノ津の遊女だ。

舳先^{へさき}に近く、松菊が真っ直ぐに前方の船をみつめて坐している。

白粉を刷いた顔。長い垂髪に作り眉。淡いみどりの小桂^{こうちぎ}に緋の袴を着^つけ、黒漆胴の鼓を小脇にかかえた姿は、遊女の正装である。

法然の一行に遊女を面会させることを禁ずるという、室ノ津の長者一同の申し合わせに気兼ねして、人目に立つことを恐れた長者が、

松菊をこっそり裏口から送り出すとき、

「さすがは平家の姫……」

と思わず嘆声をあげた、それは美しさであり気品の高さであつた。

その松菊のうしろから、元結^{もとゆい}で束ねた垂髪に作り眉という遊女姿で、簪^{かんざし}をさしかけて控えているのは、梅菊である。

そして艀^ろを漕ぐ艀取女^{とせとりめ}の小女^{こおんな}。

「おい、あれを見よ。あれは何じや。遊女じやないか」

「さすがは室ノ津よ。泊^{とまり}に近づくと、たちまち遊女が寄って来るわい」

こちらに向かって漕いで来る小端舟をみつけて、水手^{かこ}の男たちが騒ぎはじめた。

「簪^{かんざし}をさしてもろおちよる。ありや何じや。」

遊女の大將でねえかよ。美しいのう。えれえ別嬪^{べっぴん}みてえてねえか」

小端舟を認めて、やがて清原の従者たちも騒ぎはじめた。

「殿、あれを御覧なさいませ。遊女でござり

ます」

「船が来るとみるや、寄つて参ります。われらの船を何と勘違いしたのか」

手をかざして清原も小舟を眺めた。これから遊蕩に男を誘いざなおうとする顔とは到底思えぬ、思いつめた真剣な女の顔が、次第に清原の目に入つて来た。心を射抜かれる程の美しさであつた。

手をかざしたまま清原は答えた。「この船ふなべりの船舷ふなべりに来るまで、遊女の舟をそのままにしておけ。ただ遊びのために来たのではあるまい。なにゆえにわれらの許に来たのか、わしが理由わけを訊ねてみよう」

二十一

「われらは室ノ津の遊女にて、松菊と申します。このお船に法然上人さまがお乗りと伺い、み教えを賜りたく参上いたしました。そちらのお船に移ろうと申すのではありま

せぬ。何卒あわれと思召し、この小舟の上にて浄土のみ教えを賜りますこと、お許しくださいませ」

凪いでいるとはいえ、広い海の上である。ともすれば四方にかき消えていく声を、松菊は喫水の高い海船を見上げ、小端舟から声の限りに呼ばわつた。

清原の命令で漕ぐのを停止した海船の舷へりには、水手や清原配下の男たちが、鈴なりに顔をあらわして小端舟を見下ろしている。

とやがてその男たちの間から、一斉に、感嘆とも溜め息ともつかぬ声がわきあがつた。

「美しい……」

「遊女かよ、あれが。天女のようにじゃ」

「おお、天女じゃ、天女じゃ」

男たちの動揺をよそに、松菊はさらに声を張りあげた。必死の面持ちには、そのまなざしにも、眉にもあらわれている。

「我らは苦界に身を沈め、春をひさいで生きる罪深い女にござります。なれど、お上人さ

まは、かかる罪深い身にても後世を助かる道があるとお教えの由。何卒、われらにもそのみ教えをお授けくださいませ」

松菊はかさねて呼ばわった。小端舟が海船の舷へりに着くと同時に、簀はしをたたんだ梅菊も舷に居並ぶ男たちを見上げ、小女も、鱸うなぎで小舟が流されるのを防ぎながら、眸ひとみは一心に目の前の船を見上げている。

「おお、仏のみ教えを、どうして伝えずにおきましようぞ」七十五歳の法然が船舷ふなべりに姿をあらわした。

ハッと小舟の女たちに動揺が走る。

と松菊は手を合わせ、気が付くと一心に叫んでいた。

「おお、お上人さま、お助けくださりませ。

われらは何の因果か、若年より遊女を生業なりわいとして参りました罪深い身にござります。どうかわれらをも、お救いくださいませ」

波をうけて、二艘の船と舟がゆれた。鎮まるのを待つ法然と松菊の眸が、ひたと向き合

っている。

「色欲に溺れる男たちを誘いざなう遊女の生業なりわい、その罪障まことに軽くはありませぬ。その報いは測りしれますまい」

法然は語りはじめた。

「何の因果かといえは、過去世に犯した罪によつて、今世のこの憂き目に遭っているのです。しかもまた、今、あなたが犯している罪深い行いは、未来のわざわいの種ともなるでしょう」

海面が光り、海鳥が鳴きながら空をよぎった。

「もしも今、遊女として世を送る以外の渡世の道があるならば、すみやかに悪縁を断ち切り、この仕事から足を洗いなさい。また遊女以外に渡世の道がないにしても、身命をかえりみぬ決意があるならば、この仕事を厭い捨てねばなりません」



二十二

いつしか、法然の弟子だけでなく、清原も、その従者たちも、海船の男たちはみな、声を出す者もなく法然のことばに聞き入っている。船舷ふなべりを打つ波の音だけが、人々の耳に高くひびいた。

「しかし、身命を捨てることがかなわないならば、今のままで、ひたすら念仏に励みなさい。みだ仏は、あなたのような人々のためにこそ、本願をお立てになったのです」

「おお、お上人さま、その御本願をわれらにもお教えくださいませ」

波間から松菊が叫んだ。

法然の眸に、深い慈愛のかげが浮かび、彼はひたと松菊にまなざしを注ぐと、

「たとえ十悪五逆の罪を犯した人間であろうと、まごころから、なむあみだ仏、みだ仏助け給え、の念仏を称えるならば、その者を必

ず、浄土に迎えとるという御本願です。この本願を信じ、この本願に生きなければなりません。これ以外にわれらが生きる道はなく、私もこの本願に縋すがって生きているのです」

そのとき、深い感激の面持ちのまま、清原が法然に声をかけた。

「お上人、時も経ちますれば、そろそろ船を漕ぎ出しまする」

やがて水手かこの掛け声とともに、法然を乗せた海船は室ノ津の岸を目ざして漕ぎ去っていく。

後方に取り残され、次第に小さくなっていく小端舟を眺めながら、清原は法然に語りかけた。

「只今の遊女でござりますが、松菊と聞いて思い出しました。松菊は平家のさる公達きんたちの姫で、平家滅亡の後、幼少にして室ノ津に売られて来たと聞いております。遊女となるや、たちまち室ノ津一と評判になった名高い遊女にて、私は今始めて顔をみました、さす

がでござります」

二十三

それから六年が過ぎ、時代は建暦二年の春になつていた。

その春の一夜、室ノ津に泊まつたひとりの聖^{ひじり}が、月光^{ひかり}を渡るのに風雅の心をおこし、夜舟を頼んで、小島が点在する浦々の眺めを楽しんでいた。

客を求める遊女^{ひじり}たちが、小端舟をあやつり、今様を唄いながら聖の小舟とすれ違つていく。「ああ、あの女達は遊女ではないか。哀れなことよ」

聖は口の中で呟いた。

とそこへ、つと漕ぎ寄せて来た一艘の小端舟がある。

「帰りなされ」

遊女が聖を誘ないに來たと思つた舵^{かじ}取りの翁は、おどろいて小舟を叱りつけた。

「これは尊い聖のお舟である。何を考え違ひしていなさる」

「どうして考え違ひをいたしましたしょう。もとより、尊い聖と拝して参りました」

小舟の遊女は答えた。月光に照らされたその顔は、梅菊であつた。

舟と舟の舷が、互いに合う程に小端舟を近づけると、やがて梅菊は、鼓を打ち、二度、三度と和泉式部の和歌一首を朗詠する。

冥^{くら}きより 冥^{くら}き道にぞ 入りぬべき

遙かに照らせ 山の端の月

わたくしは、冥^{くら}きよりさらに冥^{くら}き道へと堕ちていくことでしよう。けれども、どうか尊きお上人さま、そしてみ仏よ、このわたくしをも、あの山の端にかかる月のように、遠く彼方から照らし、お導き下さいませ。

詠じおえた梅菊は鼓をおさめ、向かいの小舟に乗る聖に語りかけた。

「この春、京で浄土にお還りになりました法然上人さまが、さる年、四国に御配流になりましたとき、わたくしは室ノ津一とその名を知られた遊女とともに、この浦で、小端舟から法然さまのお船を見上げ、み教えを賜った者でござります」

聖にとり、それは思いがけない法然ゆかりの遊女との出会いであった。聖も、かつて度々東山の庵室に法然を訪ね、その教えをうけて来た弟子の一人であったのだ。

「おお、法然さまを知っておるとな」聖は小舟から身を乗り出すと、梅菊に向かって「法

然さまもこの室ノ津にお立ち寄りとはのう。なつかしや」

「聖さまも、法然上人さまゆかりのお方とは。み仏のお導きにござります」

「おお、おお、いかにもみ仏のお導きよ」

「共にみ教えを賜りました松菊と申すその遊女は、法然さまよりみ教えを賜ってから遊女を捨て、山麓の庵にこもって、ひたすらお念仏のうちに程なく亡くなりました。かねて労咳を病んでいたのでござります」

「おお、天晴れ、遊女往生の尊い話ではありませぬか」

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-245231

梅菊は眸を伏せた。遊女を捨てる決心もつかぬまま、梅菊はずっと今日まで、この生業に生きている。

「聖さま」やがて眸をあげた彼女は、聖をみつめ、しっかりした声で、

「ただわたくしのみが罪深く、今日まで遊女の身に生きて参りました。なれど、み仏は必ず、御本願に縫^するわたくしをもお救いくださいますでしょう。それゆえ、今、わたくしは聖さまと心ばかりの結縁をさせて頂きたく、小端舟で漕ぎ参ったのでござります」

夜の海面に、そのとき月光が一段と冴え渡った。

と近くの海面に、浮かぶ小端舟から、年老いた声の一人の遊女が声をかけて来た。

「梅菊、さつきから何をもたましてるのさ。早くお客をとつちまいなよ。お前で駄目なら、このわつちが貰おうじゃないか」

「姉^{あね}さん何を言ってるのさ。こちらのお舟にお乗りなのは、聖^{ひじり}さまではありやせんか」

声のしたほうに向かつて梅菊は叫んだ。

「へえ、そうかい。面白くもねえ。梅菊、そんならそうと、早う、さっさとこつちに来ちまいな」

年老いた声が叫び返して来た。

「お許しくださりませ」

梅菊はひとと聖をみつめて言った。そして深く一礼すると、そのまま波の音を伝わらせながら、月明かりの海面をふたたび漕ぎ去って行つた。

その後梅菊がどうなったか、歴史は何も伝えていない。しかし、ただ一つ、われらの信仰が教える確実なことは、みだ仏は、必ずやこの梅菊をも見捨て給わず、来迎し給うたに違いない、ということである。

(終)

含蓄のある御文をひとつ。

「先祖からさずかった自然じやない、先祖からあずかった自然です」

永六輔さんの『一般人名語録』（講談社文庫）は、その名の通り著名な方がかしこまっておっしゃったものではなく、ごく一般の方々の日ごろの考え、信念、はたまた何気なくおっしゃった、あるいは「思いつき」らしきものに至るまで、永氏の名語録コレクションが紹介されている興味深い一冊です。

いわば「よみひとしらず」のこれらの語録には、へ理屈ととれるものもありますが、中には哲学、宗教、真理を感じさせるものまで、多種多彩。冒頭に紹介したのはその一例です。

若和尚の

三十一 其 し な は い い ト ツ ヨ チ

「さずかる」と「あずかる」。わずか一文字の違いで、こうも重みと説得力を増すとは……。自然とは「さずかったもの」ではなくて「あずかったもの」であること、そして、子孫へ、次世代へと伝え遺していかなければならない責任と義務を負っているという大切なことを忘れていたようでした。うぬぼれた考え方に警鐘を鳴らす、筋の通った言葉ではありませんか。

こんなものも。
「自然保護っていうのは、つまるところ、人間保護だつてことがわからなきゃ」

誰にとつても、一番可愛いのは、大切なのは自分自身のはず。だからこそ、共存のためにそれを認め合い、互いに大切に、慈

しみあいなさいと説かれた、お釈迦さまのお言葉に通じるようにも思われます。他を省みずして自身の存在はありえないことを気づかせてくれました。大いに反省すべきではあります。

それにしても皆さん、よくお考えになるものです。ただただもう感心するばかりです。

「愛するのはむずかしい、愛されるのはもっとむずかしい」
まったくもってごもつとも。

「家庭というのはこんがらがった糸ですよ。こんがらがってるから家庭なんです。ほどくとバラバラになっちゃいます」、なんて言われては、もはや絶句です。

本当、勉強させていただきました、ハイ。
(正)

御法語に聴く

わが身の功德のみならず、異人ことひとのなしたらん功德をも、仏菩薩のつくらせ給いたらん功德をも随喜ずいきすれば、みなわが功德となるをもて、ことごとく極樂に廻向えこうして往生を願ねがうなり。

『御消息』

自分自身の功德のみならず、他の人が積んできた功德や、仏さまや菩薩さまが修してこられた功德を仰ぎ喜びますと、それらすべての功德がこの自分にも及ぶわけですから、そのすべてをも振り向けて極樂往生を願うのです。

思い出は極樂へ

晩秋の日曜日、娘の授業参観に出かけた。授業が終わり、子供たちが席を立つ。帰り支度かと思ったら一斉に後ろを振り向いた。

「お父さん、お母さん、今度の音楽会で唄う歌を聞いて下さい」

曲目は『二年星組、牧場へ行く』。子供たちが詩を作り、先生が作曲したという。

実はこのクラスは、小学二年に進級した今年の春から一匹の羊を飼っている。その羊との交流を、音楽会ではオペレッタにして演じようというのだ。この日は「羊との出会い」の場面を歌ってくれた。

ほとばしる歌声、生き生きとした眼。子供たちがいかに羊を慈しんできたか、痛いくらいに伝わってきた。

羊のような大きな動物を飼うのは、おそらくこの学校でもはじめてのことだろう。飼育小屋の設置にはじまり、餌の確保、糞尿の処理など困難な問題も多かろう。

しかし、動物を世話することで「いのちの尊さ」を体験し「慈悲」が芽生える。子供たちにとっては願ってもない体験だ。

それにしても、子供たちの健気な「努力」や「慈悲」は、どうやら誰彼の区別なく、まるで波紋のように広がっていくものらしい。

というのも、私自身、娘から羊の成長具合やその日の様子を聞き出しては一喜一憂し、祖父母もまたはりきっている。豆科の植物が餌になると聞いては、それを確保してくるほどのものだ。そればかりではない。最近では、親子連れやお年寄りが散歩に来たりと、羊小屋の前はちょっとした息抜きの場になっている。

ここで、ちよつと想像してもらえないだろうか。

たとえば、何か用事があつたとして、近所の学校の前にさしかかったとしよう。すると「メー」という羊の鳴き声が聞こえてきた。「まさかこんなところで」と思うが、校庭を見回すと飼育小屋に目が止まる。思わずあなたはその前に進み、のぞき込む。するとそこには紛れもない羊がいるではないか。羊はあなたに気付くと顔を上げて近づき、つぶらな瞳で再び「メー」と鳴く。

その時あなたはどうするだろう。きつと、羊の頭を撫でてやりたくな

吉野法

るだろう。それとも、何か餌はないかと探すだろうか。

もし、そんなふう想像して下さったならば、それだけでもう、あなたは子供たちの努力を讃えたことになる。慈悲を受け止めているのだ。

この稿をいつお読みになるかは分からない。しかも紙面の向こう側。それでもあなたは自分自身の慈悲に気付くのではないだろうか。

世話をする子供たちの努力、見守る父母の温もり、散歩に来た人のほのぼのとした気分、さらには羊を想像して和らいだ読者の気持ちなどなど。時間や場所を越え、これらがみんな交わり合いながら、慈悲に包まれたささやかな世界が広がっていきこう。

このように子供たちの営みは、誰でもそれを喜ぶ人に慈悲心を促す。仏菩薩の積んだ修行の功德であるなら、なおさらだ。善行の報い「功德」にはそのような働きがある。それを「随喜」といい「わが功德となる」というのだ。少なくとも私はそう思う。

さて、ここまでは「随喜」の話だ。けれども、この法語の趣旨は「ここごとく極楽に廻向して往生を願う」ことにある。

子供であろうと、仏菩薩であろうと、その善き営みに少しでも心を突き動かされたならば、大なり小なり、それらの感動すべてを携えながら極楽浄土に往生しよう、そう願えというのだ。

自分自身がなすにしろ、子供であれ、仏菩薩がなすにしろ、善行は善果、すなわち功德をもたらす。その功德は人を選ばず、時処諸縁も問わず、あらゆるものに波紋を広げる。もちろん極楽にも届くし、逆に極楽からのメッセージを感じとることもあろう。

よい思い出とは、たいがいは無償の努力に心を打たれている。随喜の結果だ。死んでも忘れたくない思い出なら、極楽に持って行けばいい。そう阿弥陀さまに願い出ることも「廻向」なのだ。

阿弥陀さまは我々のことならすべてお見通しだという。この一年も、我々のありのままをご覧になったはずだ。ならば一茶の句のように、後は阿弥陀さまにお任せして、ひたすらお念仏申すしかあるまい。極楽に持って行ける思い出が案外多いことを期待して……。

ともかくも あなた任せの としの暮 小林一茶

今年もあとひと月で暮れる。

「いいかげんにしろ、ふざけるんじゃない」と、言いつづけてきたが、何か虚しさだけが残っている。言うだけ無駄だ、世の中は、益々悪い方に向かっていく、と思えてならないからだ。今年も、金融機関の不祥事と子供の凶悪事件が特に目立った。金融機関の不祥事は、もうなにをかいわんやであるが、子供の事件には心がいたむ。いろいろな教育論が新聞、テレビなどで説かれているが、ルソーの教

育論「エミール」の一節が思い出された。

「子供を不幸にするいちばん確実な方法はなにか。それはいつでもなんでも手に入れられるようにしてやることだ」

また、六月の読売新聞に、埼玉県の小田美知代さんという主婦の詩が載っていて感動させられた。

罪

もうやめよう

子供の為に

いい大人やってきた

いい加減にしろ⑭

気づいたら

それが 自分を縛ってた

いい親演じながら

いい子求めてきた

今 子供に詫びる罪が

そこにある

長いことやってきた

そんな親 もうやめた

子育ては、実に難しい。が、

しかし、その基本は、このルソーの言葉、小田さんの詩につくされているのではないか。

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京21176372

利根川裕のホットアングル

ス。ポ。ー。ツ。と。い。う。名。の 大イベント

利根川
裕

このところ、わたしたちの国のスポーツジャーナリズムは、国際的サッカーの勝敗でもちきりである。

スポーツジャーナリズムだけではなく、ほとんどの国民あげての話題である。マスコミは、それを煽りに煽りたてている。

「ニッポンは勝てるか」。スポーツ新聞にかぎらず、一般紙もそれに血道をあげている。

テレビはなおさらのこと。

ところが、ニッポンはなかなか勝てない。

そこでマスコミはますますいきり立って、まるで「国難ここに至る」とでもいわんばかりである。

これ、少しおかしくないか。いや、大いにおかしい、という意見が出てきてもいいだろう。たかが、サッカーの国際試合なのである。しかも、まだまだアジア地区の予選の段階ではないか。

二十世紀は、スポーツがカネになる、ということを発見した。だから、プロスポーツが

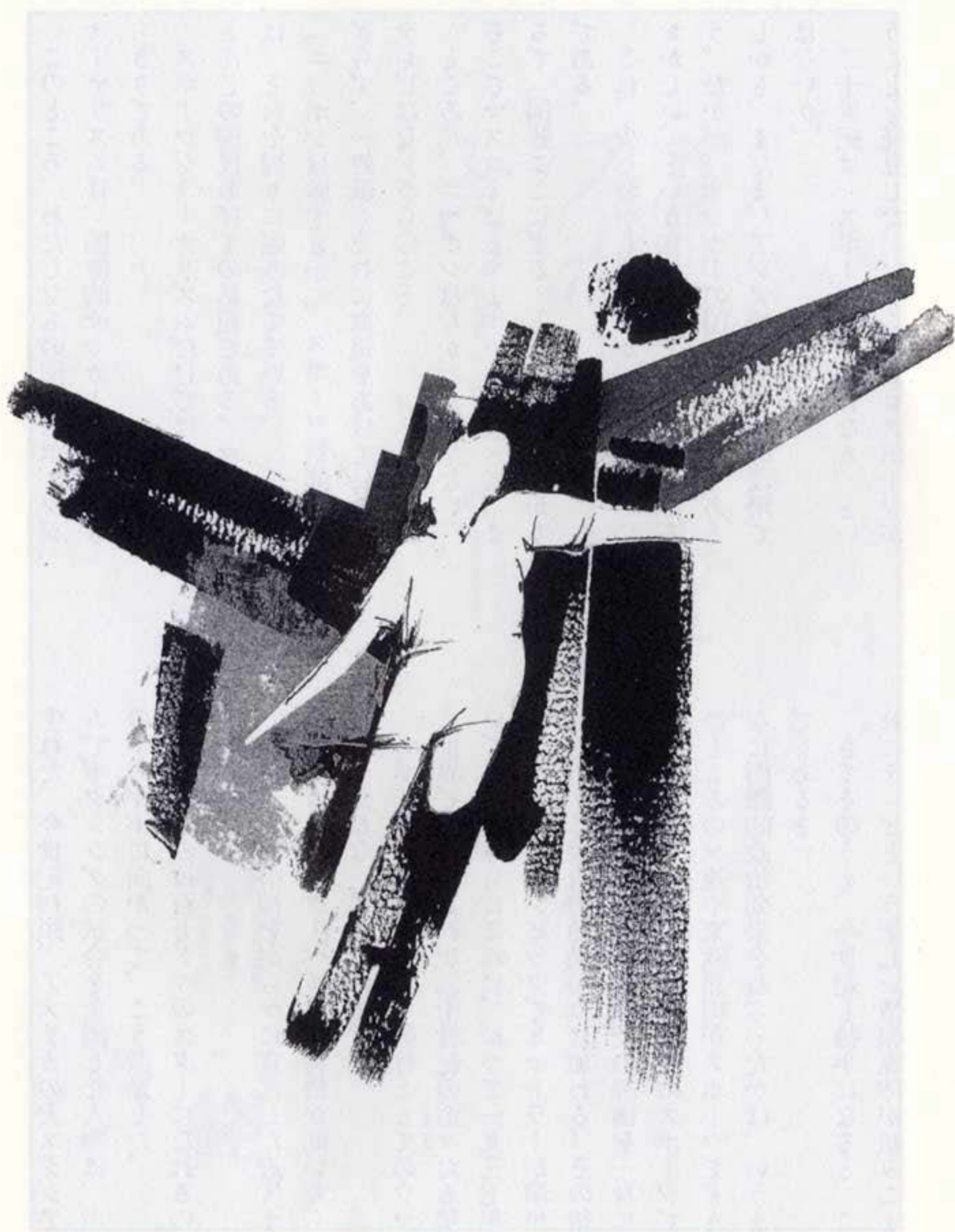
生れた。今世紀初頭、アメリカの大スタジアムでボクシングの試合を企画した人物は、当のボクサーに向かって、こう激励した。

「今日、きみは百万ドルのスターになれるのだ」と。

アマチュア精神を高らかに宣言した近代オリンピックの父クーベルタン男爵が聞いたなら、卒倒しかねない言葉である。

スポーツはカネになる。興行としてのウマイ世界である。これが二十世紀の滔々たる勢いである。さらにこれに、かつて一九三七年のベルリンオリンピックでヒトラーが演出したように政治的効果がつけ加わる。その後のヒトラーは、世界的悪役の評価を一身に引き受けることになるが、戦後のスポーツで、ひところのソ連や東欧諸国がスポーツでどんなに国際的政治効果をねらったかは、いうまでもあるまい。

さてそのうえ、今世紀も後半になると、これにテレビという新しい情報媒体が組みこま



れる。テレビにとっても、こんな見栄えのする見せものはないのである。

テレビがなかったら、こんにちのオリンピックは成り立たない。スポーツ界の大イベントはテレビが多大の収益をあげる顧客であり、スポーツ主催者にとっては、テレビ放映料はいまや欠くことの出来ない財源である。

スポーツはテレビのためにある。そう言い切ったら反発するムキのあるのは承知しているが、国際オリンピック総帥のサマラン氏はじめ、各種の世界選手権を主宰する人たちが、みんなテレビによる収益をアテにしているのは天下衆知の事実ではないか。

そこで、サッカーにもどる。

さきごろのソウルでの韓日戦。結果は、やつとニッポンが勝った。マスコミはじめ日本国中がニッポンの勝利にこだわっていたのだから、勝ってよかった。ほんとうに、よかった。が、正直のところ、手ばなしで喜べないものが、ないでもない。

テレビが写しだした当日の日本国内の反応も、「韓国が負けてくれたんじゃない」という声が、かなりあった。というのも、この試合に先立って、韓国からの情報では、「ニッポンと一緒にフランスへ行こうよ」とか、「これまでの試合でニッポンは不運だった」とかいう声があり、それを主張するマスコミまであった。当の監督やプレイヤーたちはまさかそんなことはいわないが、こんなマスコミ論調があれば、「韓国が負けてくれたんじゃない」と思っても致しかたあるまい。

「ニッポンと一緒に決戦場のフランスへ行こう」。これは、あたたかい話である。うれしい心情でないでもない。が、国際戦を戦う以前に、こんな論調がまかり通るというのは、ヘンではないか。

しかも試合当日、ソウルの競技場には、六千人とか七千人とかの韓国警察官が動員されたのである。数万の観衆が集まるのだから、警備のいることは分るが、六万人とか七万人

入るスタジアムに、その一割に当たる警官が立ち入ってニラミをきかせるというのはタイヘンなことである。

早い話、一万人か二万人入る大相撲の国技館に、千人か二千人の警官が張りついているという光景は想像できまい。

しかし、サッカーでは、ある。げんに、あった。

そこで、である。片方ではすでに決戦場のフランスへ行く権利を獲得している韓国が、「ニッポンも一緒に」という国際友好的雰囲気盛あげ、片方ではおびただしい警官を配置して、いやがうえにも緊張を盛りあげる。これ、演出ではないのか。テレビ向けの演出ではないのか。

誤解を防ぐためにいっておくが、ひとり韓国がわをあげつらっているのではない。日本のマスコミもこれに同調して、大いに話題づくりに精出したのである。多かれ少なかれ、どこの国であれ、これが二十世紀のスポーツ

大イベントの実情である。

国際オリンピックピックをはじめとして、各種の世界選手権大会は、さまざまな商業主義と手を結んで、イベントとしての演出に知恵を傾けている。ナガノの冬期オリンピックもしくり。

盛大な見せものの性と、それにかんだカネの動きと、それに国際政治性も連動しながら、世紀のスポーツの祭典がくりひろげられる。

こうみてくると、スポーツ大会は、テレビを動員した見せものの性と、莫大なカネの動く商業性と、そしてそれをうまく利用しようとする政治性のからみこんでいる点で、二十世紀末のひとつの標本のようにある。かなり歪んだ標本だ、といっていいかもしれない。

いまのところ、これにつけるクスリは見当たらないようである。

(作家)

平成 新訂 諷 誦 撰

待望の回向文集、諷誦文集ができました！

『新諷誦撰』刊行から十一年。

今ここに、『諷誦撰』が生まれ変わりました。

新作、口語調など多数加わり、

従来の文章も整理して、

より一層充実した諷誦撰ができました。



上製・布クロス貼り

定価2,700円 (税・送料込)

◇内容を再吟味。回向文とは何かから考えました。

◇サイズは従来通り、持ち運びに便利な大きさ。

(タテ一九センチ、ヨコ八センチ)

◇総ルビ付。

監修 大室了皓／大谷寿雄／山本康彦
編集 ふじゅせん刊行会 代表・長谷川岱潤

お申し込み先

ふじゅせん刊行会

〒141 東京都品川区上大崎1-9-11 (戒法寺内)

TEL:03-3441-8971 FAX:03-3441-8702

郵便振替00150-8-158563 ふじゅせん刊行会

うまい野菜と



料理の話⑪

あるいは

セ
ッ
ッ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな
愉しみ

我田大

大豆の収穫の話です。

ガッタコン足踏脱穀機で豆を落としながら思った。「枝豆は大豆の若菜」とか「大豆には多くの品種がある」とか「煮食のほか豆腐、納豆、キナコ、味噌、醤油などに加工したり、搾油原料に用いる」とかは知っている人が多いだろう。でも、種蒔きから収穫まで、そして収穫してから、どうやったらあの売っている袋入りの大豆のようになるのか、その工程の細部までわかる人は今は少ないだろうな、と。

食って死ぬ人間のくせに、食料調達はそのため自分の体を動かさなくても、ゼニカネと交換でできるようになっている世の中です。が、何の因果か野菜や穀物栽培にはまりこんだ私は、幸か不幸か、大規模な機械を使わない栽培収穫のやり方、つまりは昔ながらの方法の実際を知ることになった。

私は今年は次のような大豆を作った。サツポロミドリ、盆香り、茶豆、香り豆、砂糖豆、一人娘という七月末から一〇月までの枝豆用ラインアップ。味噌用のエンレイ。煎り豆・

キナコ用に青入道。煮豆用の黒平豆・丹波黒豆。ひたし豆用のクラカケ・ヒラマメ。他に種子保存で信濃青豆と信濃黒豆。数えると一四だ。自家採種が基本だから、枝豆用のも種用にと少し食い残しておくし、そのほかのは種子を食用目的で栽培しているのだ。とりいれ、脱穀・調製・乾燥しなければならぬ。

枝豆の時期を過ぎると大豆は葉などが黄ばんできます。黄色(茶褐色)になる品種もあくなったら畑に立たせたまま、葉と葉柄をとってしまえます。「豆の手をもぐ」とこらじやいいます。とったのはそこらになげちらかしておきます。とくに肥料というわけではありません。脱穀(「豆落とし」とこらじやい)の時、邪魔になるからあらかじめとります。こうやって「ボーズにされた」豆の木が並んだ景色は、秋です。

子どもの頃には捨てる豆の手で、虫籠状のと国会議事堂状のと鍋敷状の品を作ったことを思い出した。そんな遊びもしていた。年上の子か年寄りに習ったのだろう。その名前

と作り方の細部は忘れていますが、現物を持てば作り方は手が思い出すかもしれない。と書いたら、もう豆の手の感触は思い出している。また、その箸のような豆の手を一本づつ組み合わせることによって立体が出現してくるのは、自分の奥のほうに原初的なイメージとして残っているようだ。国会議事堂状の先端や側面のイメージは、はつきり思い浮かべることができます。それがどうしてか、などはわかりませんが。

手をとってしばらくたつと乾燥して（「からびる」とこらじやいう）一部の莢がはぜ、豆がこぼれるようになってきます。収穫適期です。晴れた日の午前に豆を地際から刈るか、こぐかします。それを適量づつまとめ、縄やツナギ（スグツタ藁の先端どうしを結んだもの）で束ねます。家に運んできて、ニワにシート（昔はムシロ）を敷き、ならべひろげ陽に当てて乾かしておきます。

すらっと書きましたがそれぞれ意味があるのです。午前はまだ朝のツユ気が残る莢が開

きにくい。開く寸前の莢は動かすと豆がこぼれるから、そうなりにくい朝にとつてくるのです。こいでもいいのですが、刈るのは根についた土の混入を嫌うためです。ニワは庭園のことではありません。シートはもちろんこぼれたのを逃がさぬためです。

そう乾かしておいて別の仕事をしたりし、昼飯を食ってから落としにかかります。よく乾燥していると、持つとカラカラ音がする。こういう状態だとハカチがいく（はかどる）。マメオトシにもいろいろのやり方があります。量や状態によってまた好みで、どれかが採用されるようです。

①まず歩くの。並べた上をみしみし踏んづけて歩く。状態の良いのだとこれで大半が出てしまう。豆が散らばらないし、莢も木にくっついていて後の処理が楽。しかしよく乾いていないのは踏んづけたくらいでは出ません。在来種はいろいろ混じって斉一には熟しませんから、未熟なのは分けて後でするようにします。

1031ko
またまた
冬金河



②たたく系。棒やヨコツチ（柄が槌の円の中心につく）でたたく。左手で豆の柄を持って回しながら、まんべんなくたたく。とんとんとんとりとリズムカルな音がいい。桶や段ボール箱の内面にたたきつけるという手もある。豆が散らばらないでいい。莢のカラーがあまり落ちないのもいい。

③足踏式脱穀機（「ガッタコン」という人もいる）。昔、稲の脱穀に使っていたもの。

ミシンのように足踏み動力でドラム（こき胴）をまわす。それには鉄の逆U字型の釘が植わっていて穀粒をこき落とす仕掛け。それ以前の脱穀用具センバコキに比べ能率を格段に上げたという。やがて動力はモーターやディーゼルエンジンに変わり、今はコンバインに内蔵されている。が、基本的なメカニズムは変わっていないようです。

片足で立って片足で踏む。前方に回転させるようドラムを助走（？）させうまく踏む。ゴーガッタコンゴーというような音がする。俗名の由来でしょう。

豆の木を一本とりドラムに当てがうと、あつという間にバラバラと落ちる。裏返したり末、元とまんべんなくあてる。間違って持っている手がUにあたるとすごく痛い。軍手は必ず着用せねばなりません。

あ、忘れていた、シートとかゴザでドラムをカバーをしておかないと豆がめちやくちや散らばります。そこは各自工夫します。

これはむりやり落とすので少々湿けた莢でも苦にしません。しかし力まかせにちぎりますので落ちた豆にカラ莢が多く混じってしまいます。でも作業が早いので大量の時はこれです。落とした実入り莢、空の莢、実、ゴミの混合物は、次に竹製のトーシ（通し）という大型の篩（ふるい）にかけ、①豆と小型のゴミ②空莢と実入りの莢と大型のゴミ、に分けます。①はタカミ、（高箕）かトーミ、（唐箕）でハギリます。高箕は竹などでできたチリトリ形の大きいのです。唐箕は、手回し風車で風を送った先に少しづつ①が落とし、重さで豆とゴミを選別できるようにした木製の

農具です。

ハギルとは豆粒以外のゴミをとることです。風選というか。適量のゴミと豆の混合物を高箕にとり、体の前でばたばたゆすると（このへんうまく言いあらわせない。ビデオでもあれば）そのためおきた風でゴミが飛んでいつたり集まったりします。それをぶうつと吹き飛ばしたり手でとったりする。それをくり返してきれいにするのです。上に投げあげて風の力で飛ばせばいいようですが、いい風がないとゴミもろとも高箕に戻ります。

吹き飛ばす時は高箕に否応なしに顔を近づけなければなりません。見ればゴミは土、莢についていた毛、莢のきれっばじ、未熟豆、虫食い豆、奇形豆、何かの幼虫だろう芋虫蛆虫などです。

こうやってハギったのは容器にあけます。その時も一気にザアッとあけないでザラザラ流すようにします。丸い豆はコロコロと転げますが細かいゴミ（の幾分か）は高箕の微妙な凹凸に引っかかって取り除けるからです。

いつもですが、高箕などという簡単な道具で選別できるのが不思議なようです。プラスチック製で同じことをやってみると、形は同じようでも弾力とか凹凸とかだめでヤになる。代替できません。

②も高箕でハギリ、実入りの莢だけ残します。それを天日乾燥し叩いたりして実を出し、ハギリます。

こうしてやっと全部実だけになります。これをまた天気の良い日はシートに広げ、何日も干します。これを保存容器に移しやっと収穫の終わりです。

種子用にはその中から更にいいものだけをみいだすのです。

豆を落とした豆の木はマメガラとこころじやいます。まとめしばって燃やしてしまうのですが、一部保存しておいて正月のしめ縄にくくりつけます。和紙で巻き昆布でしばっています。またイロリのあつた頃は、元旦の朝その年最初の火はその家の主人がマメガラでつける習わしでした。

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

仏教経典と

バイブル



毎月、『浄土』を楽しく読ませていただいております。

これまで積み重ねてきた年の数に比例してか、最近、会社やその他の関係で、お葬儀に参列することが多くなってきました。

そんな昨今、ふと疑問に思っていることがあります。

そのお葬儀によって、つまり、お葬儀をつとめて下さるお寺の宗旨によって、読まれるお経が違うということは以前から知っていましたが、なぜ、そういったことがおこるのか、あらためて不思議に感じています。

浄土宗、臨済宗、日蓮宗……。ほかにも宗派はあるようですが、読まれるお経は皆違うとか。それらの宗派で読まれているものの他にも、相当な数にのぼるお経があるとも聞きました。

仏教はインドに逆上り、中国や南方の国々にも弘まっているのですから、やはりそちらにもいろいろなお経があるのでしょいか、宗

派もたくさんあるのでしょいか。

もちろんどのお経も宗派も「仏教」ではあるのでしょいか、「仏教」という大きな枠でひとまとめにしてとらえるのには、何となく無理があるようにも感じられます。

私は、キリスト教系の学校に通った関係で若干聖書に親しんだという経緯がありますが、少なくともキリスト教では、仏教のようにたくさん種類の「お経」はありません。

お経は、お釈迦さまの説かれた教えの語録と理解していますが、お釈迦さまは、そんなにたくさんのお教えを説かれたのですか。それはなぜですか。

また、浄土宗で読まれるお経のこと、そして他の数多いお経の中での位置づけなどもお教えいただきたいと思っています。

まとまりのない質問で恐縮ですが、これらのことが整理でき得ないでおります私の心中をお察しの上、是非、ご教示ください。

(神奈川・団体職員)



大室

ご質問の内容を、二つに絞ってお答え致します。

一、キリスト教の経典は、バイブルだけですが、仏教の経典はどうして種類も多く、沢山あるのですか。

お答え

ア、布教期間の違い

釈尊は三十五歳でお悟りされてから、亡くなられる八十歳までの四十五年の間、毎日朝昼夕の三回にわたって、布教されました。その時々のお話が基本になって、経典が作られました。

キリストは、三十歳頃から二年と数ヶ月の僅かな間の布教でした。

釈尊の布教の期間は、キリストの二十倍以上であったことから、仏教経典の多いことがお分かりかと思えます。

イ、経典の違い

仏教経典は、釈尊在世中に説かれたものを直接耳にしたものを、弟子達が集まって綴つ

たもの。それを元にして亡くなられた後、数百年間に互って書かれたもの。更にその註釈書など膨大なものがあります。

それらをまとめたものが「大蔵経」あるいは「一切経」と言います。

大蔵経としては、パーリ語、チベット語、蒙古語、満州語、漢語のものが現在残っています。

わが国で昭和時代に完成した大正新修大蔵経は全百巻に漢訳のもの、更に日本の仏典を含めて三千五十三部等が納められています。

キリスト教の聖典であるバイブル特に新約聖書は二十七巻。

これにはキリストの説いた神の国と救いの教えが述べられていますが、イエスの生涯と教えを記した「福音書」が四巻、最初の弟子達の伝道と初期の教会の歴史である「使徒行伝記」一巻。パウロの手紙が十三巻。ペテロ、ヨハネなどの手紙が七巻。そして著者不明の手紙「ヘブル書」と「ヨハネ黙示録」などで

構成されています。

中でも良く知られているのは、イエスの言行録と生涯を伝えている次の四つの福音書です。

イエスの直弟子であり、宣教を初めて以来寝食を共にしてきたマタイとヨハネが書いた「マタイ伝」と「ヨハネ伝」。

マルコはまだ少年で直弟子にはなれませんでした。イエスの第一弟子のペテロの話を元にして彼が書いた「マルコ伝」。

イエスの教えが広く近隣諸国に伝わってから、今までの資料を綿密に調べ、目撃者に当たって、順序立ててルカが書いたという「ルカ伝」です。

更に旧約聖書は三十九巻が正典とされており、新旧合わせたものが「聖書」と呼ばれていました。一冊の本になっていますが大変分厚いものです。しかしその量と種類は仏教経典の比ではありません。

仏典には釈尊の言行録的なものも少なくあ

りませんが（例えば法句経）、相手に応じて説かれましたので、修行者だけが救われる教え、修行者も含めて全ての人が救われる教えなど様々のものがあります。

更に言行録とは違って、論文の様な形式のものが少なくありません。

例えば有名な「華嚴経」は、全世界をある仏の現れとし、一微塵の中に全世界を映じ、一瞬の中に永遠を含むという一即一切・一切即一の世界を展開しているということが説かれています。

また「大般若経」には「空」について説かれています。その教えを大胆に凝縮したものが「般若心経」と言われています。

二、浄土宗ではどのようなお経が読まれるのですか。

お答え

浄土宗を開かれた法然上人は、学問もなく財産もなく、罪ばかり作っている凡人が救われる道を求めて、大蔵経を五回も読まれました。

た。

そして、これこそ長年求めてきた經典として、無量寿經・觀無量寿經・阿弥陀經の三つを選ばれ、浄土宗のお経とされました。

無量寿經には、阿弥陀如来のすべての人を救う本願が、觀無量寿經には、救われるための行としての念仏、阿弥陀經には極楽浄土のことが説かれています。

凡夫が救われるには、これらのお経の教えに依らねばならないと、法然上人が私達のために選ばれたのです。

ですからこの三卷を浄土三部經として、浄土宗ではその全部あるいは一部を毎日読んでいるのです。

●むすび

仏教の經典はキリスト教のバイブルのように、手軽に誰でもたやすく読むことが出来ません。

そのために昔から多くの仏教者によって、和訳の經典が数多く作られています。

それらの中から、次の「仏教聖典」をご紹介します。これは世界の殆どの言葉に翻訳され、世界中の多くのホテルにバイブルと同じように各部屋に置いてあります。

多くの經典から、要文を選び整理してありますので、この一冊をお読みになれば仏教の教えが良くお分かりになると思います。

「仏教聖典」 仏教伝道協会発行

東京都港区芝四一三十四

FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、
TVウォッチング、紀行文その他創作等。
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

晩秋 初冬

詩上俳壇

あちこちの紅葉の便り夢の中

初雪や北窓の富士居間飾る

年寄りの胸の勲章赤い羽根

児玉良男（三島市）

時化去りて戻り鰯の糶^{せり}市場

海荒れて一日永かり秋刀魚食う

佐藤雅子（上山市）

本堂の再建決す秋日和

音たててドサツと落ちしカリンの実

熟柿に鳥はだまつてついはみ又飛び行けり

山本美代子（姫路市）

はやばやと樹灯またたく暮の秋

へんだこの消えてはるかや栗をむく

内堀綾子（小金井市）

からだじゅう草虱つけ哄笑す

溝蕎麦や閻魔の在す切り通し

松本厚子（町田市）

晩秋 初冬

詩上俳壇

地下鉄のあかりの落ちる一瞬間

上田規夫（国立市）

秋の天義妹の恋を見届ける

秋夕焼空地の土管に人が住み

笠井亞子（中野区）

行列の先頭見えず藪からし

るす番の今日は鬱の日秋時雨

鯉跳ねて池落着かず振草

吉田ゆきゑ（江戸川区）

蓬髪少年の手に烏瓜

真ん中が抜けたる夢に曼珠沙華

大畑 等 (船橋市)

つくだ煮に目玉がありて文化の日

枯蝶や生き落つ先の普陀落寺

井口吾郎 (大田区)

待ちぼうけ裏階段の冬日和

東京の訛り気付かぬ百日草

ふりむけばなお見送りぬ十三夜

矢島 寛 (台東区)

夕立にぬれたる肩を拭きくれし

小春日や病涯の身を髪床に

山茶花の派手に散りしく石畳
すだく虫ゐるらし闇へ耳澄ます

石田良吉（世田谷区）

虫の音を止める大川新能

端座して猫も見上げる今日の月

藤木芳清（中野区）

石榴重し鬼子母神の夜咄よ

一心に鳴き一心に聴く虫の闇

日野智恵（中野区）

失せ物は出るも用なし冬じたく

腕時計コトリと置かば冷えはじめ

中吉をページに挟み日向ぼこ

小さき指神立つ夜を積み木つむ

秋深く魚も赤き血をしたり

風呂屋から煙突生える十三夜

風見鶏釣瓶落しに飛びたてり

落葉焚く御詠歌いづこより流る

近藤啞々砂（鳥羽市）

長谷川 裕（目黒区）

児玉仁良（入間市）

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもっともっとたくさん作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先の要領でほとんどご応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

- 1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
- 2 俳句・短歌・川柳など…四首まで
- 3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽に聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 十二月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他。ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

平成九年度の会費未納の方は
お早目にお支払い下さい。

振替

法然上人讃仰会

〇〇一八〇一八八二一八七

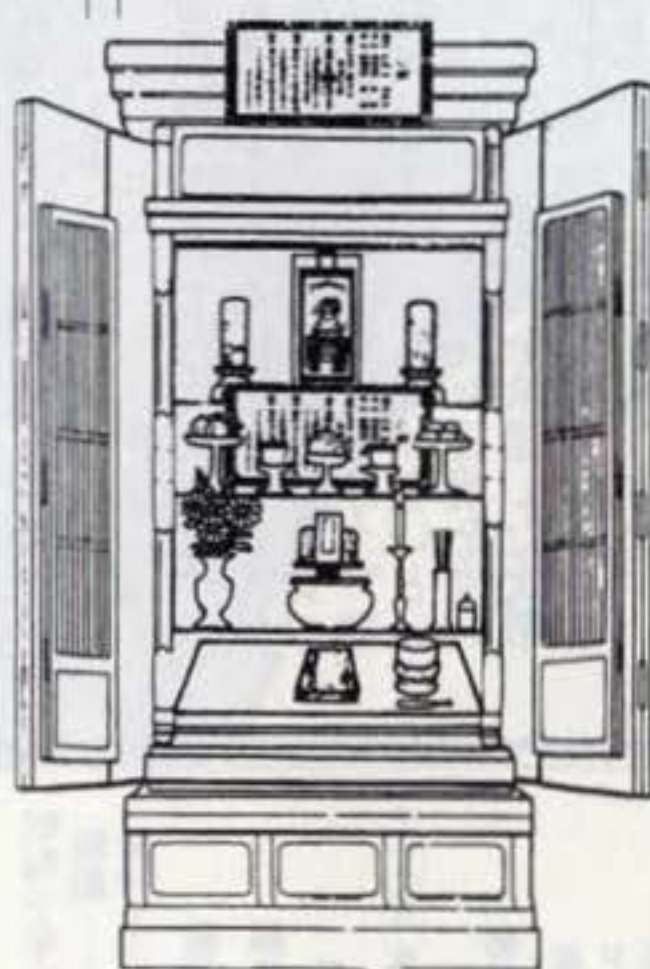
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）735円／小（27.3×14.2cm）420円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



みずみずし血の流れたる師走かな

岱潤

最近自分自身の注意深さのなさとおちよこちよいにはいささか呆かされている。ついこの間も犬小屋を造ろうと、送られてきたダンボールの箱を開けるのにハサミを使っている、いきおいあまりそのまま自分の左手の手首に、ハサミをブスリと刺してしまった。頸動脈の近くでもあり、血がいきおいよく吹き出し、慌てて右手で押さえたものの、ドクドクと次から次と血が沸き出してきた。しかしその血の何と水っぽいことか、血というものはもっとドロドロしているものと思っていたが、吹き出す血はまったく水のような液体であった。つくづくとこういう赤い液体が、体の中をいつも流れているのだなあと実感した。

血が水っぽいのは、疲れているせいなのか、飲み過ぎのせいなのか、それともこれが普通なのか、わからないが、そんな怪我也一週間てなおり、今では傷口だけがまるで自殺未遂者のように残っている。

本年一月号から連載頂いている石丸晶子先生の「法然上人をめぐる人々」が、今回でいったん休むこととなった。学会の運営委員長などの重責で現在多忙を極め、先生が今の状況では『浄土』誌として納得のゆく原稿が思うように書けないという、本誌にとっては誠にありがたいお言葉を頂いてのことでもあり、一年間の休刊を承諾した次第である。読者諸氏には誠に残念なことではあります。が、一年後を楽しみにどうぞご了解下さい。

今年も早いもので、十二月を迎えてしまった。読者諸氏も怪我と健康にはご注意下さい。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十四巻十二月号、頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成九年十一月二十五日

発行——平成九年十二月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 シーテイエー

〒一〇五 東京都港区芝公園四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇八八二一八七

Cima, Cima.



ここにニッサンの最高があります。新しいシーマ

シーマがあることで、あなたの生活にどんな感動と満足が生まれるだろうか。私たちは今、大きな自信を持って話せます。技術を注ぎ、性能に妥協せず、あらゆる状況で、「これぞシーマ」の乗り心地を楽しんでいただけると。あなたがクルマに理想として求めてきたことが、こんどのシーマに実現できたと。すみずみまで「ニッサンの最高」によさわしい仕上がり。風格と躍動感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い歓びが待っています。シーマ/シーマ/あなたの熱い賞賛の声が聴こえそうです。日本車初。全車、SRSサイドエアバッグ標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に加わる衝撃を緩和します。大きく進化した4.1ℓ V8エンジン搭載。シーマのために開発。優越感あふれるスペックが、滑らかで力強い加速を生みます。



Photo/シーマ41ℓV ボディカラー ダークブルー・メタリック・ブラック・ホワイト(P) (※4S9・特別塗装色) 本革シートはメーカーオプション ●全長4970×全幅1820×全高1445(mm) ●エンジンV8 4130cc TWINCAM ●最高出力270ps/5600rpm(ネット値) ●最大トルク38.4kgm/4000rpm ●運転席・助手席SRSサイドエアバッグ ●デュアルエアバッグ(運転席・助手席SRSエアバッグ) ●ABS(アンチロックブレーキシステム) ●V-TCS ●AVシステム(TV機能付) ●運転席オートドライビングポジションシート ※一部車種に搭載。シーマのお求めは、お近くのローレル・スカイライン各販売店へ。

スピードおさえ、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをクルマに。

この冬に集まれ、
この味が冬物語。



さらり、味わい深く。ウィーンタイプビール

冬季限定

冬物語



新
登
場

●ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ  サッポロビール株式会社

ご協力のお願ひ：自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。サッポロビールホームページアドレス <http://www.mediagalaxy.co.jp/sapporo/>

法然上人鑽仰会・発行